

経営者が感じる韓国人の「変化」



福岡 静哉

日本を訪れた韓国人は2025年、約946万人で、史上最多を更新した。それでも飽き足らず、韓国国内でも「日本」を楽しみたい人が訪れる場所がある。

首都ソウルの中心部から車で約1時間の京畿道東豆川市にあるテーマパーク「にじもりスタジオ」^{ドスタジオ}施設内に入ると、韓国人店員から「いらっしやいませ！」と日本語で声を掛けられる。

約4万平方メートルの敷地内には純和風の家屋が建ち並び、すしや天ぷら、うどんなど日本食の飲食店が並び、着物の貸し出しコーナーや宿泊できる和風旅館も。小さな城の建設まで進む。

入場料は2万ウォン（約2100円）と安くはないが、若者や家族連れでにぎわう。ソウルから恋人と来た男性会社員（31）は「毎月でも日本に行きたいが、旅行は費用と時間がかかる。ここは週末に気軽に『日本』を感じられてありがたい」と話す。

スタジオは21年秋にオープンした。当時は新型コロナナ終息前で訪日が難しく、人気に火がついた。

ただ、総括プロデューサーの金城模さん^{キムジン}（53）によると、オープン前は周囲から「やめた方がいい」との忠告も受けた。開設準備を進めていた19年、日本の対韓輸出規制強化への対抗策として、日本商品の不買運動「ノー・ジャパン」が起きたからだ。しかし金さんら経営陣の意志は変わらなかった。「日本文化が好きなのは多く、いずれ社会の空気も変わるはずだ」と確信していた。

経営は軌道に乗り、コロナ終息後も順調という。今も時折、日本の植民地支配による歴史を無視している、などと批判を受けることがあるが「政治的な非難は気にしていない」と意に介さない。

日本に長年関わってきた金さんが感じている変化がある。「韓国人は、以前は『日本に行ってくる』だったのが、最近は『福岡に行ってくる』『仙台に行ってきたよ』と言う人が増えた。訪日の機会が増える中で日韓が同じ生活圏のような感覚になっている。それほど、日本が身近になっている」

日本からも25年、365万人が訪韓した。日韓は今後も、政治的に対立する局面が来るかもしれない。そんな時、こうした日韓の交流が、両国関係の足を支えるに違いない。